

苗場山麓 ジオパーク

Vol.

43

振興協議会だより

〔発行日〕 令和2年6月26日
〔発行〕 苗場山麓ジオパーク推進室
〔お問い合わせ〕 025-765-1600

認定ジオガイド
が伝える

ここが好きだよジオパーク

認定ジオガイドがおすすめの場所、もの、ことなどを紹介していきます。 村山洋一郎さん



釣り竿かついでジオパーク（ガイド No.18 村山洋一郎）

ここ苗場山麓ジオパークは全国の溪流釣り師の一部からは垂涎の的地として有名です。各種のメディアを通じて幾度となくその釣果が大袈裟に取り上げられています。千曲川から遡上した志久見川の梅雨時の巨大ヤマメ、清津川支流釜川上流の天然巨大イワナ、信濃川から遡上した清津川の尺鮎等々。釣り師であれば誰もが一度はお目にかかりたい幻の魚です。夢を追いかけるのも釣り師の宿命ですが、釣り竿を片手に釣果はそこにジオパーク巡りを堪能することもおすすめです。まずは栄村の学問の神として有名な北野天満宮をお参りしてからすぐ近くの志久見川上流の北見川、ここは極野集落を越えて奥まで車両通行可、関東からの釣り師が多いところ



志久見川支流の釜川



イワナ



志久見川支流・横平川の甕穴（ポットホール）

です。坪野集落を流れる天代川は荒れた林道を歩いてください（車両通行止めとなっています）。とことん歩くと野沢温泉についてしまいます。両河川ともとくに危険な箇所もなく初心者でも釣行可能ですが油断せず楽しんでください。なおこの周辺は縄文時代の刃物として利用された毛無山の溶岩の一部である無斑晶ガラス質安山岩の露頭が見られますが、無断で持ち帰らないでください。またこの地域は信州の豪族市河氏の前線基地として栄えたところでした。山城・館巡り、古道散策もおすすめです。帰りに「北野天満温泉学問の湯」でひと汗流すのが通のジオパーク巡りと釣り師の約束ごとです。

次に紹介するのは眼病に霊験あらたかな見玉不動尊の近くを流れる中津川支流黒滝川です。「谷の展望台」や笹葉峰大崩落地もぜひ見学してください。黒滝橋からの入渓は中級者以上のコースとなりますのでおすすめできません。小松原湿原太田新田ルート of 林道のゲートまで進み上流を徒歩で。ほかに本格的な支度をしなくても溪流魚に出合える場所も秘密ですが数箇所あります。釣りを楽しむためには必ず遊漁券をお買い求めください。またクマの棲む領域に入り込むことになりますのでくれぐれもご注意ください。

苗場山麓をぶらり歩こう！

苗場山麓は、日本海の海底だった時代を経て隆起し、その後、約80万年前に噴火した鳥甲山から流れ出した溶岩の上に、約30万年前に噴火した苗場山から静かに流れた溶岩が重なり、大地の基盤を形成しています。鳥甲溶岩と苗場溶岩が流れた方向や面積は違うことが知られています。例えば、清水川原の“大嵜（おおくら）”と呼ばれる岩壁は、この二つの溶岩が重なることで二段の紅葉が生まれます。

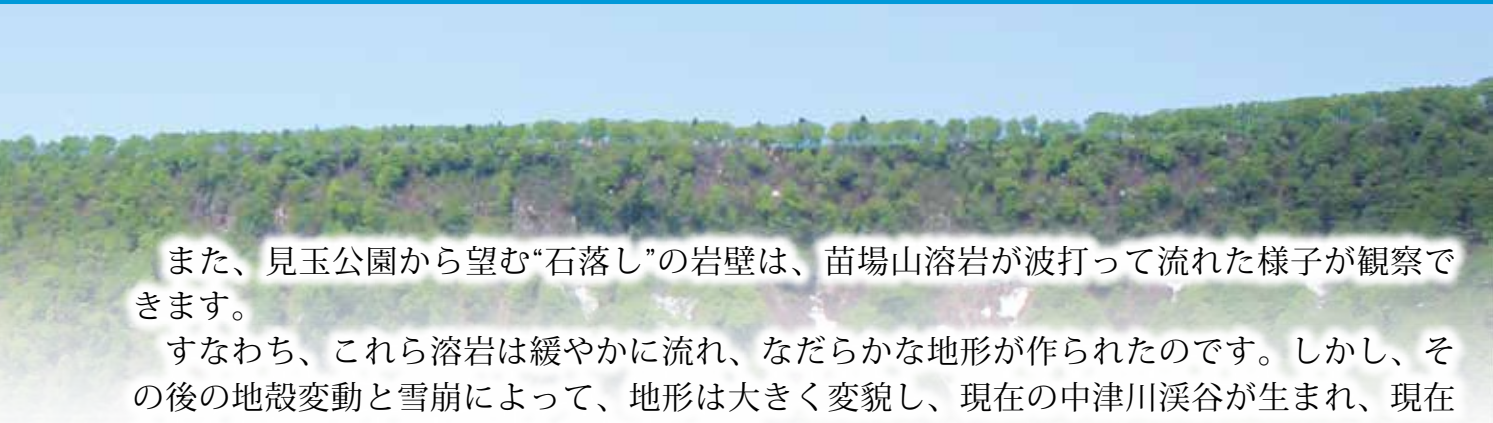


逆巻の大嵜



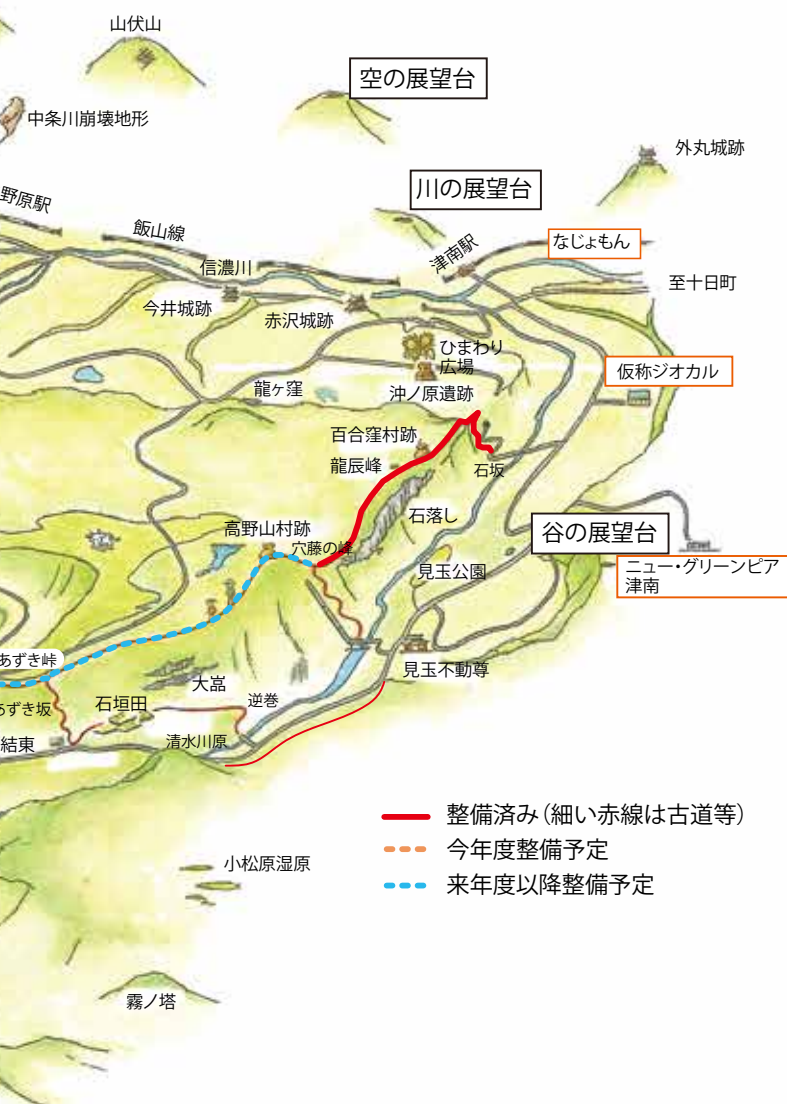
苗場山麓の自然を未来につなげるために下記は守ってトレッキングを楽しんでください。

- ・ ゴミは持ち帰ってください
- ・ 植物や鉱物は採らないでください
- ・ 野生動物に気をつけ餌を与えないでください



また、見玉公園から望む“石落とし”の岩壁は、苗場山溶岩が波打って流れた様子が観察できます。

すなわち、これら溶岩は緩やかに流れ、なだらかな地形が作られたのです。しかし、その後の地殻変動と雪崩によって、地形は大きく変貌し、現在の中津川溪谷が生まれ、現在なお生き物のように変化し続けています。



V字状の溪谷である中津川の左岸に、昔あった山道を繋げトレッキングルートを作ろうという事業が進行しています。現段階では、石坂―風穴―百合窪村跡―龍辰峰―穴藤の峰を繋ぐ散策道が第1期事業として完了しています。第2期は、前倉のトドー鳥甲牧場入り口までが昨年完成しました。第3期の今年度は、鳥甲牧場―矢櫃村跡をつなげる予定です。第4期は、穴藤の峰―高野山村跡―あずき峠―前倉のトドを2～3年かけてつなぐ予定です。それと平行して矢櫃村跡―大秋山村跡―切明までのコースをどのようにするかを慎重に協議する予定です。

これらの中津川左岸トレッキングルートが完成すると、現在国道405号線のアスファルト道を利用しているスノーカントリートレイルが、自動的に中津川左岸ルートに変更される予定です。



さらに視点を広げると、信越トレイルが延伸して、あずき峠を交差し、結東―見倉―大赤沢―小赤沢―苗場山頂までのルートが計画されています。また、切明から野反湖を結ぶ登山道が群馬県境トレイルと交差し、群馬県境トレイルは水上まで伸びており、そこでスノーカントリートレイルと結線します。すなわち、豊かな自然環境と歴史文化を包括する日本一のトレイル網がコンクリートジャングルの首都圏から2時間足らずで存在することになります。その中心に苗場山麓がある意味を噛みしめ、未来に持続できる観光の本質を探究したいものです。



「苗場山麓ジオパーク 自然資源・文化資源保護憲章」を制定しました！

苗場山麓の主峰である苗場山を、深田久弥は日本百名山に数え、その山容を「鯨の背のように」と形容し、田中澄江は鈴木牧之が感動したお花畑を『花の百名山』に数えました。また、苗場山に近接する佐武流山は、林野庁が「佐武流山周辺生態系保護地域」に定め、その自然が原生的な状態で残っている地域であり、第2の白神山地（世界遺産）とも呼ばれています。さらに、山容が苗場山と対称的な鳥甲山は、串田孫一郎が「道のない山へのあこがれ」として雄峰の素晴らしさを紹介しました。



苗場山と小赤沢集落

これら豊かな自然環境が残されているのが苗場山麓の特徴です。苗場山系は火山活動と関わり、悠久の時間の中で地殻変動や雪崩で崩壊し、地形を大きく変え、現在の秋山郷が位置する中津川溪谷を形成しました。そのV字溪谷に残る風穴周辺は、崩壊が生じた時代の古い生態環境がそのまま残されている植物のタイムカプセルです。すなわち、風穴周辺には、本来その標高では生育しないような、北方系の植物が生育しています。さらに、豪雪地帯の山棲み生活には、マタギ文化の残影やアンギン衣の製作技術、渋さらしを背景に残されたトチノミの粉食習俗が残された「生きた野外民俗博物館」とも称されていることも大きな特徴です。

これらは、ジオ+エコ+カルチャーの三要素で構成されている地域資源です。ユネスコプログラムは、この地域資源を保全管理し、持続的な地域振興に繋げ新しい価値の創出を推進しています。

私たち苗場山麓ジオパーク振興協議会は、この豊かな自然環境（自然資源）とそれを背景に育まれた雪国文化（文化資源）の価値を共有・共創し、未来への宝物を大切にするためのスローガンとして「自然資源・文化資源保護憲章」を定めました。



突撃しよう！となりのジオ便り～ジオパーク秩父からこんにちは～（秩父まるごとジオパーク上席推進員 吉田健一）

関越道・花園ICを降り西へ20分、秩父盆地東の山を貫くトンネルをぬけるとジオパーク秩父です。出口左手の「ムクゲ公園」では盆地地形が一望できます。車で行ける「美の山」や「ミューズパーク」も絶景ポイント。多様な地質が変化に富んだ地形をつくり、そこで大地と関わる独特の風土が育まれました。

盆地内には河成段丘（上・中・下位）がよく発達し、川は深い所を流れて段丘面は畑ばかり。ここに桑を植え蚕を飼うのが秩父の人の生業でした。「秩父銘仙館」はその歴史を伝えています。日本三大夜祭と言われる秩父夜祭も絹市を盛り上げるためのものでした。絹は峠越えて江戸・東京に運ばれ、その交易を通じて文化が持ち込まれました。江戸の歌舞伎は地芝居として今でも祭りでも上演されます。自由民権思想も伝わり、絹相場が暴落した明治17年（1884）この思想に導かれた困窮農民（秩父困民党）による秩父事件が発生、道の駅「龍勢会館」でその歴史が学べます。



秩父盆地

慶運5年（708）には秩父の銅が朝廷に献上され貨幣「和同開珎」となり元号も和銅に、黒谷の聖神社は今パワースポット銭神様で賑わっています。武甲山の石灰岩は渋沢栄一の導きにより「秩父セメント」となり東京の近代化に貢献、金・鉄の採掘のため小倉沢の山奥にあった2,500人程が住んだ秩父鉱山、結晶質石灰岩採掘に移行しましたが廃屋がたくさん残っています。

盆地を取り巻く山は中生代ジュラ紀の付加体、西へ続く谷（山中部溝帯）は恐竜化石を産する白亜紀の地層、山梨県境には火成岩と鉱床、甲武信ヶ岳（火成岩）は信濃川の源流域で苗場山麓につながっています。東側は変成岩、長瀨の岩畳は必見。盆地内は新生代新第三紀の海（古秩父湾）に堆積した地層、海底地すべり跡や鯨・パレオパラドキシア化石が見つかります。秩父は古生代から新生代の岩石・地層、火成岩・堆積岩・変成岩が見られ、明治の頃から研究者・学生が訪れ「日本地質学発祥の地」と言われています。



海底地すべり跡

地質を知るには「埼玉県立自然の博物館」や「おがの化石館」がお勧めです。秩父の自然は1970年代頃から「資源（材木・薪炭・石灰岩）」としての利用から「癒し（紅葉・花・札所）」へと移行、産業人を育てた秩父農高は東京からの玄関・西武秩父駅にその場所を譲り、桑畑は「芝桜の丘」山の牧場は「天空のポピー」そして雲海・氷柱や地形・地質を楽しむ地となりました。ジオパーク秩父では「大地の記憶」と風土を楽しんでいただけます。